



黄色い命のハンカチ作戦

農村の高齢化も激しいが、大都市近郊住宅地の高齢化も著しい▼西東京市の南部、最寄りの駅が中央線の武蔵境となる住宅地に住んでいるが、中古住宅を取得し改築・入居して、早や35年が過ぎた。ここの自治会は、200世帯弱を会員とし、15組に分けて構成されている▼自治会には約10年おきに回ってくる組長をつとめる程度で、正直なところ、あえて関係を避けてきた。それがとあるいきさつから自治会役員の打診を受けることになった。会長、副会長とも八十代後半と高齢であり、また個人的にもこれまで地元には一顧だにせずきたサラリーマン生活を深く反省して、承諾。昨年度1年間、自治会副会長として見習い・引継ぎをし、この5月から会長をつとめている▼当自治会の基本問題は会員の高齢化にある。一人住まいも増えており、家に閉じこもって外部との接触は乏しく、連絡もなかなかとれない会員もいる。象徴的に、何年かに1回まわってくる組長の役割が果たせない高齢会員もいて、組長選出に苦慮する組もある▼自治会が抱える問題は多々あるが、会員の最大の関心事は大震災等災害発生時の対応にある。いかにして緊急時に地域力を発揮して自助・共助できるようにしていくか。メインとして「黄色い命のハンカチ作戦」に取り組んでいくことにした。これは震度5強以上の地震が発生した場合、無事な家庭は玄関先に黄色いハンカチを結び付けて、無事を知らせるとともに、ハンカチのない家を優先しての手助けを誘導するものである。高齢者や一人住まいの老人の安心・無事にもつながることを期待している。

(土着菌)